

50 幕末期、院内銀山の医療と近郷の医師達 「門屋養安日記」にみる庶民の医療(三)

蒔 昭 三

今回は門屋養安日記から幕末期の一地域での患者をめぐる医師相互の交流を分析し、当時の庶民の医療を検討したので報告する。

* 銀山の人口は天保期から明治初期まで約三千人であり、狭い地域に密集して生活している。その人口特性は男が女より多く、特に十五歳―三十九歳の男が多いことである。

* 院内銀山の医師数・院内銀山は十九世紀からは佐竹藩直轄地で、人々の出入りや物資の出入も厳しい管制化におかれている。従って居住する医師も「抱え医」が原則で、年代によって人数も異なり一人〜三人である。抱え医の業務については前回報告したが、人口の七十%を占める労働者とその家族の医療はきわめて不安定であった

と推定できる。

* 医師数に比べ大きかった医療需要からか、日記には頻繁に近郷の医師の銀山町への「往診」の状況が記されている。天保六年から養安が隠居した嘉永四年までの十六年間に限定しても五十一名の医師が来銀している。これらの居住地は三十キロメートルも離れた地域を含んで二十ヶ村に及び、湯沢十名、横堀五名、下院内・岩崎が二名、その他からは各一名で、当時のそれぞれの集落に居住した医師数を表現しているようでもある。

* 特に遠方から往診を求められた医師の特徴は外科、産科、眼科、入歯医等である。その他に詰合や重手代の診察に久保田の医学館教授などが来銀している。これらは銀山の医療需要が多かった点を示すとともに、当時は一般的にも町医者には相当遠方でも自由に往来しあつていたことを示唆して重要である。

* これらの医師の往診の記載内容から往診を類別すると次のようになる。

① 養安が主治医であるが、病気が専門外のために他の医者
の対診が必要となった例。② 養安が主治医であるが、

重症のため養安自身が他の医者への対診を求めた例。③養安が治療しているがどうも効果なく、家族等が他の医者への対診を求めた例。④もともとその家の主治医が近郷の医師であり、その医師が往診にきた例

以上、③や④の場合でも複数の医師が病家で比較的自由に病態や投薬内容について論議している点が特徴的である。また対診の医師の意見で投薬内容を変更しているケースもみられる。詰合の治療のために医学館教授が約二十四日間も銀山町に滞在している特別の例もあるが、多くの往診は日帰り、一泊(宿屋、患者宅)、二〜三泊(患者宅か?)が多い。

* 銀山町での本科、外科以外の病気の対応では、出産異常には近郷の産科医の往診、頭瘡治療には近郷の外科医へ通院、眼病は近郷の眼科医に往診を求めるか、通院している。尾張の眼科医を受診するために旅立ったケースも見られる。歯病では入歯師が銀山町を訪れた時に集中的に行われ、湯治のための旅行も見られる。また病気が改善しないために祈禱やいたこの口寄せも行われてもいる。

* 銀山町の医療と「旅医者」…日記には新庄や仙台、江戸などの遠方から一時的に院内銀山を訪れ、短期間(一ヶ月〜一ケ年)居住して医療を行っている医師も何人か記載されている。「病草子」の「旅の医者」、佐渡相川の「旅医者」と以前からこのような「旅医者」が存在したが、短期間そこに居住し医療を行う医師の実態をこの日記はかなり克明に書いている点が貴重である。銀山の住民の医療はこれらの旅医者に依存していた面も多い。またこれは当時の町医者の弱い経済状態を端的に示しているように興味深い。

* 日記にはしばしば近郷の医師相互の薬物の借貸の記載がある。また日記には「談葉」という表現がしばしば記載されている。患者で複数の医師が出会った折にその患者への投薬内容を論議することを意味しており、患者で行われたり、宿屋で一泊して酒を酌み交わしながら行われたりしている。今日の症例検討会のようなもので当時の医師が相互に虚心坦懐に薬方などを討論している記載は特筆すべきものであろう。